

英語教育における絵本の活用に関する考察

—Real Books、Reading Schemes、ELT 絵本の比較分析を通して—

A Study on the Usage of Picture Books in English Language Teaching:
Through Comparative Analysis of Real Books, Reading Schemes and ELT Picture Books

村松麻里

Mari MURAMATSU

Abstract: Picture books used today in English language teaching can be divided into three categories: (1) real books—picture books written with native English-speaking readers in mind, that is, books we have traditionally called “picture books.” The readers usually enjoy equally the story and the pictures; (2) reading schemes—picture books written as textbooks for literacy education with native English-speaking readers in mind; and (3) ELT picture books—picture books written as textbooks with non-English speaking readers in mind.

Among those three, reading schemes are little known in Japan; hence, there are few previous studies of them. In the U.K. they have seldom been regarded as appropriate materials for non-native learners despite their good reputation. Because of this, in this paper the author has closely examined the individual characteristics of the three different kinds of picture books, including reading schemes, and proceeded to look into the potential of reading schemes for English language teaching.

This paper reports the following findings: In the case of real books, rather complicated and abstract expressions are found. Readers are required to search for the meanings of words and the significance of the work itself, with the help of their own creative imagination. However, in return for the efforts required, readers can enjoy both an exciting narrative and rich English expressions.

In the case of ELT picture books, the pictures and words strictly correspond to each other and abstract or indicative expressions are initially excluded; therefore, readers are required to confirm the meaning of the words, with the help of the correspondence between picture and words. While difficult expressions and words are initially excluded, there remains some sense of unnaturalness in terms of

English usage and narrative.

In the case of reading schemes, some elements are shared with the above two. Highly indicative expressions tend to be excluded and the English used sounds quite natural to native-speaking readers. And the words most frequently used in children's lives are repeated again and again as the story proceeds. The story is also exciting and has depth, as in real books. Reading schemes with the merits of both of real books and ELT picture books can be said to have great potential as textbooks in future English language teaching. In view of this, further studies and applications are expected in English language teaching in Japan.

1. 英語教育と絵本

(1) 3種類の英語絵本

現在、英語教育の世界では、とくに幼児・小学生を対象に絵本が幅広く活用されている。英語で書かれた絵本には、大別すると、英語母語話者の子どもたちが物語として楽しむために作成された絵本、つまり私たちが日ごろから「絵本」と呼び慣わしてきた絵本（real books）と、初めから英語を教えることを目的として作成された絵本（ELT 絵本）の2種類がある。しかし、これに加えてここ数年で徐々に日本でも知られるようになってきた、もうひとつの絵本がある。それは、英語母語話者の子どもたちが読み書きを学ぶための、彼らにとっての「国語（English）」、リテラシーの教科書として作成された reading schemes と呼ばれる絵本である。これら3種類の英語絵本¹について、以下の表1にまとめる。

表1 3種類の英語絵本

3種類の英語絵本	
real books	従来の絵本
reading schemes	英語母語話者のリテラシー教育のために編纂された教材絵本。昔話などの原作を再話（書き換え）した retold version もあるが、教育現場で主流として使用されているのは retold version ではなく、作者の創作によるオリジナル絵本である。
ELT 絵本	英語学習者の英語教育のために編纂された教材絵本。昔話などの原作を再話（書き換え）した retold version と、当初から作者の創作による絵本とがある。

real books と reading schemes は「母語」としての英語で書かれているが、ELT 絵本は「非母語＝外国語／第二言語」としての英語で書かれている。reading schemes と ELT 絵本は「教材」だが、real books は「非教材」の物語作品である。ひとくくりに「英語絵本」といってもそれぞれの「絵本」にはこうした性質の違いに由来する、構造上・言語上の独自の特徴があるといえよう（詳細は下記参照）。

(2) 日本の英語教育における絵本活用・絵本研究の現状と本研究の目的

これら 3 種類の英語絵本のうち、real books や ELT 絵本が英語教育の現場で使用されるケースは多くみられる。しかしながら、reading schemes については日本ではまだその存在自体の認知度が低く、英語教材としての活用事例は限られている。したがって、reading schemes を英語教育の視点からとらえ検証した日本国内の先行研究はきわめて少ない。一方 reading schemes を小学校のリテラシー（読み書き）教育における中心的教材として用いるイギリスでは、当然ながら reading schemes は広く認知されている。しかしながら、reading schemes を非母語話者の外国語教育へ応用するという想定は本来なされていないため、英語教育の視点から reading schemes を扱った学術文献は非常に限られている。

本論ではこうした事情に鑑み、以下の 2 点を目的としている。(1) 3 種類の絵本の特徴を明らかにすることにより、英語教育の観点からみたそれぞれの有効性を示唆すること、(2) とりわけ、先行研究が少なく日本でいまだ認知度の低い reading schemes に光をあてつつ、その概要を紹介すること。

2. 研究方法

(1) テキスト分析

まず、前述の 3 種類の英語絵本の比較分析を行う。分析対象は、主として絵本の歴史が長く、reading schemes を National Curriculum におけるリテラシー教育の柱として策定し、広く活用しているイギリスで出版された絵本とする。real books が、教材絵本である reading schemes や ELT 絵本に書き換えられる（retold）過程で、テキストに加えられた変更・削除・付加に着目する。

あわせて、原作に依拠した retold version ではなく、作者の創作によって書かれた reading schemes を単独で分析し、語彙・文法上の構成や物語構造の基底にある作者の意図を、教師用指導書の記述を参照しながら分析する。

(2) 分析手法

言語面での分析においては、ヤコブソンの「詩的機能²」やハリデイの「結束性³」などを中心概念とする。また、絵本全体の分析においては、絵とことばの両面を射程におさめる絵本論の視座を取り入れる。絵本論では、絵本とは「絵がなければ立つことのできない文と、文がなければ立つことのできない絵が、たがいに相手を必要としながら、創る表現世界」（内田、2006, p. 134）であるとされ、text-image interaction (Nikorajeva & Scott, 2006, p. 8)、すなわちことばと絵の関係のあり方や相互作用も重要な要素として位置づけられている。本稿では、言語面の分析に加えてこうした絵本論の視点を取り入れ、現代絵本ならではの絵本の描き方（文字をデザインの一部として位置づける、効果的なめくり構成、非明示的な文章、多義的な解釈が可能なス

トーリーの描き方など)とも対比しながら、3種類の絵本のなかでことばがどのように機能しているか、あるいは機能を損なっているかをみていく。

3. real books・ELT 絵本の比較分析

(1) real books と ELT 絵本の比較

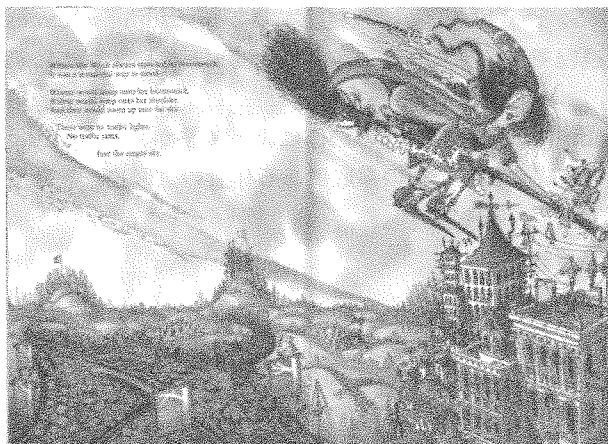
*Winnie Flies Again*⁴という物語絵本の real books と、これを ELT 絵本として書き換えた retold version とを比較する。両者のイラストとプロットは同一であり、言語面のみが書き換えられている。なお、ELT 絵本版には付録として問題集と Picture Dictionary が収録されている。

【*Winnie Flies Again* あらすじ】 空を飛び回ることが大好きな魔女の Winnie と愛猫 Wilbur は、近代化による空の交通渋滞によって空中飛行の危険が増したため、飛行を断念せざるをえない状況に追い込まれる。やむなく Winnie たちは、空飛ぶほうきの代わりに自転車やスケートボード、馬といった地上の乗り物を試すがうまくいかない。歩きに切り替えてもやはりうまくいかない。そんな折、ふとした偶然からメガネを入手した Winnie は、乗り物ではなくメガネという手段によって再び飛べるようになる。

以下、第1場面を比較する。[下線および囲み・引用者]

下線が引いてあるのは変更が施された部分、四角く囲んであるのは real books 版から削除されたり ELT 絵本版で新たに付加された部分である。なお、real books 版が過去時制を使用しているのに対し、ELT 絵本版ではほぼすべての文章で現在時制が使用されているが、時制の変更についてはあえて下線・囲みをしていない。

real books 版では以下のようにになっている。



【real books】

Winnie the Witch always travelled by broomstick.

It was a wonderful way to travel.

Winnie would jump onto her broomstick.

Wilbur would jump onto her shoulder. And they would zoom up into the sky.

There were no traffic lights.

No traffic jams.

Just the empty sky.

図1 real books 版 第1場面

一方、ELT 絵本版は以下のとおりである。



【ELT 絵本】

I Winnie flies.

Winnie the Witch loves flying.
She flies on her broomstick.

Winnie jumps on her broomstick.
Then Wilbur jumps on Winnie's
shoulder,
and they fly up into the sky.

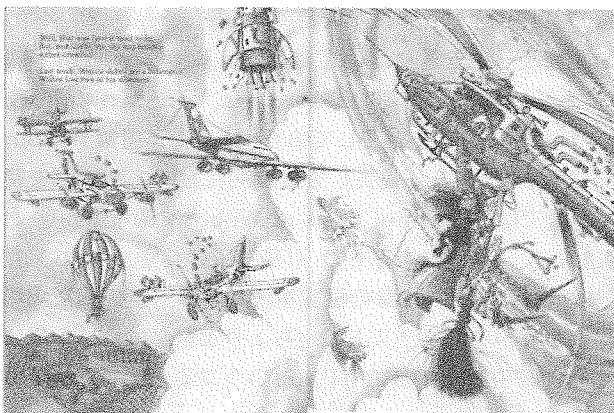
ZOOM! [太字・コミック調フォント]

図2 ELT 絵本版 第1場面

ELT 絵本版には、real books にはなかった、チャプター番号・チャプター名が設けられ、ページ番号が振られていることがわかる。過去形の語りはすべて現在形となり、〈zoom up〉が〈fly up〉に置き換わるなど、文法上・語彙上も変化がみられる。また、「いつもほうきで空を飛んでいました」という過去の習慣を説明する記述が「飛ぶことが大好きです」という今現在の好みの記述になるなど、意味内容にも変更がみられる。加えて、かつての空には交通信号も交通渋滞もなく、ただからっぽの空が広がっていたという記述がすべて削除され、新たに〈ZOOM!〉という擬音語がコミック調の太字で付加されている。

第2場面においても同様に、変更・削除・付加が行われている。

real books 版では以下のようにになっている。



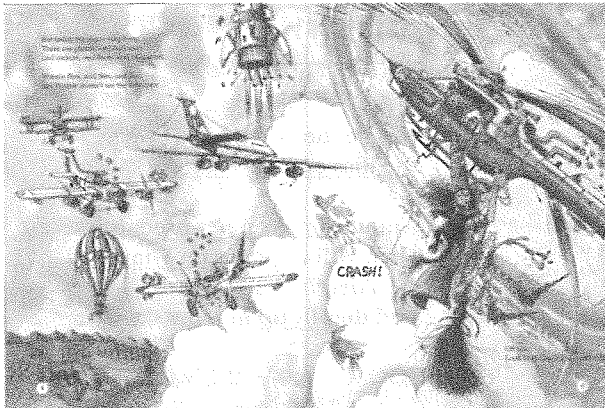
【real books】

Well, that was how it used to be.
But, just lately, the sky had become
rather crowded.

Last week, Winnie didn't see a
helicopter.
Wilbur lost two of his whiskers.

図3 real books 版 第2場面

一方、ELT 絵本版は以下のとおりである。



【ELT 絵本】

But today the sky is very busy.

There are planes, and balloons, and
rockets, and birds, and helicopters.

Winnie flies, and flies, and flies.
But Winnie doesn't see the
helicopter.

Oh no! Look at Wilbur's whiskers!

図4 ELT 絵本版 第2場面

real books 版では〈used to be〉と〈just lately〉という大きな時の流れが示され、時の経過によってもなつて空の混雑が生じたことが述べられ、両者の因果関係が示唆されているが、現在形のみ使用される ELT 絵本版では過去の描写が削除され、現在の状況のみに焦点をあてた描写となっている。ここでは、空の混雑状態の説明として、〈planes〉、〈balloons〉、〈rockets〉など、渋滞を構成する事物の名称が新たに列挙されている。また、この Winnie とヘリコプターの衝突の描写の前には、real books 版では〈just lately〉という時間幅のなかの一時点を限定する〈last week〉という時をあらわす副詞句が添えられているが、ELT 絵本版では、これに代わって〈Winnie flies, and flies, and flies.〉という、Winnie が激しく飛行したことを描写する一文が付加されている。前者では、〈used to be〉→〈just lately〉→〈Last week〉の間に時間的なつながりがあるため、Winnie とヘリとの衝突が起きた要因について、近代化によつて空の混雑のせいであることが暗にイメージされるが、後者では、むしろ空が混雑しているのにもかかわらず Winnie があまりにも激しく空を飛び回ったことによつて引き起こされた衝突であるかのようなイメージを与える可能性がある。

また、猫の Wilbur が衝突の際に 2 本の髭を失った記述については、real books 版と ELT 絵本版とで、表現方法と文章の配置場所が異なっている。前者では、〈Last week, Winnie didn't see a helicopter.〉の記述の直後に文章が配置されて同一段落を構成しており、表現としては〈Wilbur lost two of his whiskers.〉というように、〈lost〉という「喪失」を直接的に意味する単語を使って表現している。他方、後者の ELT 絵本版では、〈Oh no! Look at Wilbur's whiskers!〉というように、髭を、「喪失」や「不在」ではなく、「存在」するもの（「落ちていく髭」）として扱い、そこに注意を向ける（Look at）よう指示している。文章の配置場所は右ページの衝突現場のそばに移動しており、独立した段落を構成している。イラストの、ちょうど髭がはらはら舞い落ちていく傍らの位置には、読者の注意が髭に向くよう〈CRASH!〉というコミック調の太字で書かれたオノマトペが新たに付加されている。

(2) 分析

1) メタ言語を使用したテキスト化

チャプター化やページ番号の挿入、コミック調フォントの使用などは、いずれも物語内部の出来事ではなく、作り手側が施したしかけ、すなわちメタ言語的しかけである。この作品では物語を〈1. Winnie flies. / 2. Winnie rides. / 3. Winnie walks. / 4. Winnie flies again.〉の四つに分割し、それぞれを四つの動詞の下に整理している。これらの動詞はいずれも巻末付録の picture dictionary に収録されている英語学習用の基本動詞である。ページ番号は、付録の問題集にある「〇ページを見ながら解答しなさい」という設問に対応するために必要な記号である。こうしたメタ言語・メタ記号を使用して、ELT 絵本は物語作品をテキスト化していると考えられる。

2) 言及指示性の高い記述

ELT 絵本版第1場面(図2参照)で削除されたものは、〈no traffic lights〉、〈no traffic jams〉と〈empty sky〉という「存在しない」もの、すなわち、イラストに描いて文字と照応させることのできないものや、「具象性に欠ける」ものの記述である。

これに対し、第2場面(図4参照)では、real books にはなかった〈planes〉、〈balloons〉、〈rockets〉などの具象物が付加されている。これらはむしろ、「絵を見ればわかる」ものであるが、ELT 絵本ではこれらの名前をあえて文字化して付加しているのである。これはいずれも付録の picture dictionary に収録されている単語であるため、物語の効果を高めるためというよりも、むしろ言語学習上の指導目標に即して付加されたと考えられる。

63

3) 過去形から現在時制への書き換え・語彙上の書き換え

英語の過去形は不規則変化する単語も多く、英語学習者にとっては難易度が高い。そこで、初歩レベルの ELT 絵本では、過去形・過去完了形を書き換えて現在形を使用するケースが珍しくない。しかし、物語の語りに用いる時制としては、現在形は不自然であり、母語話者たちは通常は使用しない。

また、時制を現在形に書き換えるということは、過去と現在の対比的表現ができなくなるということである。これにより real books にもともとあった物語の展開を ELT 絵本では再現することができなくなり、現在形では話のつじつまが合わなくなるような事態が生じた場合に、ELT 絵本では当該箇所の記述をまるごと削除したり、別の意味合いの記述に変更したりするのである(詳細は後述)。

難易度が高く、教科書絵本には不適切と判断された語彙・文法が含まれる描写についても同様に、削除や変更の処理が行われる。

(3) 考察

1) テーマの喪失

ELT 絵本版において言語面の改変が行われたことにより、同一のイラストとプロットをもつはずの二つのヴァージョンの絵本は、物語としてのメッセージ、すなわち「意味」の領域においても、差異を生んだ。

たとえば、時制の書き換えではつぎのような差異が生じた。real books 版では、〈used to be〉と〈just lately〉という二つの文言により時間対比を明確に描くことで、自由な空が存在した「か

つて」と、空に交通渋滞が生じるようになった「つい最近」を浮き彫りにしていた。このようにして、「時間の経過＝近代化」がこの作品に不可欠のテーマであることが暗に示唆されていたが、現在形のみで描写された ELT 絵本版には「近代と喪失」のテーマは読みとれない。

2) 物語構造の喪失と意味の変容

real books 版では、物語の始まりと終わり、すなわち、第 1 場面の冒頭部分と最終場面の結び部分とが同じ構文の反復によって対をなしている。

第 1 場面では、

Winnie the Witch always travelled by broomstick.
It was a wonderful way to travel.

最終場面では、

Now Winnie and Wilbur travel everywhere by broomstick.
It's a wonderful way to travel.

となっている。[下線・引用者]

同じ構文を時制を変えて反復したこの対の描写があることで、第 1 場面の「過去」と最終場面の「現在」との時間のコントラストが引き立つと同時に、読者にとっては〈Now〉と〈Now 以前〉との間に起きた展開、すなわち Winnie の身に降りかかった出来事（飛行の喪失と再獲得）の意味を暗に問われることになる。構文という形式上の反復があるからこそ、その差異（＝時制の差異が象徴する意味）が際立つのである。

したがって、物語構造的にも意味内容的にも、この結びはこの物語を結束化・テキスト化する大事な記述であって、絶対に書き換えられてはならない箇所である。

しかし、ELT 絵本版では、この結びの文が、

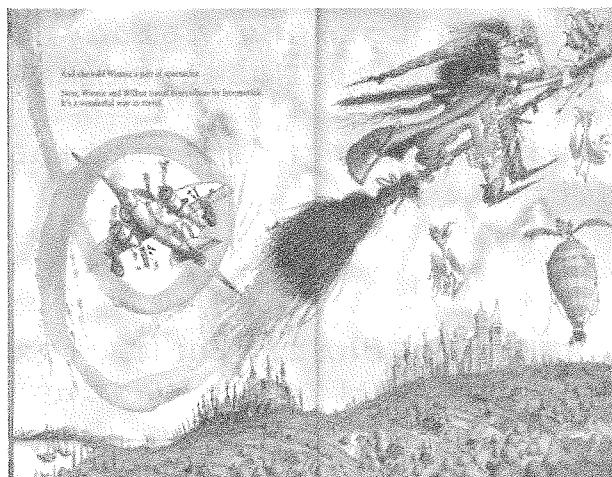


図 5 real books 版 最終場面

‘Now Winnie can see everything! ...So Winnie and Wilbur can fly again!’

となっている。

チャプター1の見出し〈Winnie flies.〉とこの結びを含むチャプター4の見出し〈Winnie flies again.〉が対になってはいるが、これ以外に物語全体をテキスト化する詩的機能はみられない。本文だけを見た場合には、ここで働く詩的機能は〈can see〉と〈can fly〉の対であり、強調されるのは『『見えるようになった』おかげで『飛べるようになった』』という、メガネと飛行再開との因果関係である。過去と現在を対比する時制や〈no traffic lights / no traffic jams〉、〈empty sky〉の描写を削除した時点で、ELT 絵本版における物語テーマは、「近代と喪失」のテーマを切り捨て、四つのチャプター見出しに象徴される「移動手段をめぐる問題」へと重点を移している。どちらのヴァージョンも「飛行の断念と再獲得」というプロットは同一だが、そこにあるメッセージには差異が生じたといえる。

(4) 絵本論の視点から見た問題点

言語教育上の配慮から施されたこれらの書き換えには、しかし、絵本論の視点から見た場合には本質的な問題がある。

絵とことばの関係のあり方に即して絵本を分類しようとする試みは、国内外の多くの作家や絵本研究者们によってなされている。その典型的な例は下の分類である (Nikorajeva & Scott, 2006, p. 1)。

- (a) the exhibit book: picture dictionary (no narrative)
- (b) the picture narrative: wordless or with very few words
- (c) the picturebook, or picture storybook: text and picture equally important
- (d) the illustrated book: the text can exist independently

65

このなかで「絵本」= ‘picturebook⁵’ ということばが冠されているのは (c) だけだが、実際には (b) も (c) と同様の絵本として評価されている。

(a) では、narrative すなわち「物語 (としての語り)」がなされているか否かが問われている。たとえ絵と文字の両方があっても両者の間に創造的な相互関係がなくことばにも絵にも物語性がない場合、それは絵本とはみなされない。これとは反対に、(b) では、文字がない場合にさえ picture narrative が存在する点が指摘されている。ことばだけでなく、絵 (一枚一枚の絵の連続体としての絵本) にも「物語る力」が存在することを示すものである。また、(c) と (d) では、絵とことばとの関係性が問題視されている。絵がそれ自体物語ることなくことばに従属し、単に説明的に添えられているだけならば、それは「絵本」ではなく「挿画本」となる

絵本論では、絵本を「絵と文が一体となって一つのイメージを伝えるもの」(松本, 1982, p. 11) ととらえ、絵とことばの間に interaction あるいは interanimation があるものと定義している。換言すれば、「絵本のことば」とは、絵の存在を前提として書かれた絵本独自のことばでなければならないのである (Nikorajeva & Scott, 2006; Lewis, 2001)。

以上のような絵本論の視座に照らした場合、前節までに指摘したように本来は必要のないことばを語彙習得目的で書き足したり、もともとあったことばを削除、変更し本来の物語構造を壊してまで文法や語彙を書き換え、物語の時系列に手を加えてしまう ELT 絵本は、純粋な「絵本」

と定義するには問題があると認めざるをえない。

一例をあげれば、先に述べた *Winnie Flies Again* において削除された 〈no traffic lights〉、〈no traffic jams〉、〈empty sky〉の記述は、第一場面で読者にこれらのことばとともに読者に印象づけるはずだった「かつて」の「自由」な大空というイメージを、絵の「語り」から奪ったことになる。反対に、〈planes〉、〈balloons〉、〈rockets〉といった単語の付加は、あえて言語化せずとも絵を見ればわかるため、絵本論の見地からすれば不要といえる。「ものの名前を教える」という教育的見地から行われた ELT 絵本における単語の付加は、この物語を「絵本」= 'picture book' から picture dictionary のような 'exhibit book' へと質的に変容させたことになる。

4. reading schemes のテキスト分析

(1) reading schemes の構造

前章では real books と ELT 絵本の比較分析を行ったが、では、reading schemes とは一体どのようなものだろうか。これより、イギリスでもっともポピュラーな reading schemes シリーズ中の 1 冊である *Floppy's Bath* を題材としてその構造や特徴を示し、最終章において 3 種類の英語絵本を振り返るとともに、英語教育における有効性を検証する。

まずは、以下のとおり、*Floppy's Bath* のあらすじと、書き出しおよび結びページの画像（図 6、図 7）、物語全体の重要構文を抜粋した言語構成のダイアグラム（図 8）（Hunt, Page, & Pemberton, 1996, p. 34）を紹介する。

66

【*Floppy's Bath* あらすじ】一家の愛犬 Floppy は、ある雨の日、公園で一羽のウサギを見つける。ウサギを追いかけて回すうちに泥だらけになった Floppy を偶然通りかかった Dad たちが家へ連れ帰り、一家総出で洗いあげる。ピカピカになりリボンをつけてもらった Floppy が再び公園を散歩していると、「おや、まあ！」…再びウサギを発見してしまう。

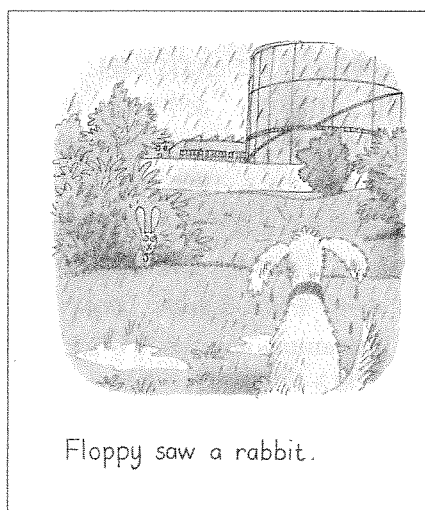


図 6 *Floppy's Bath* 第 1 ページ

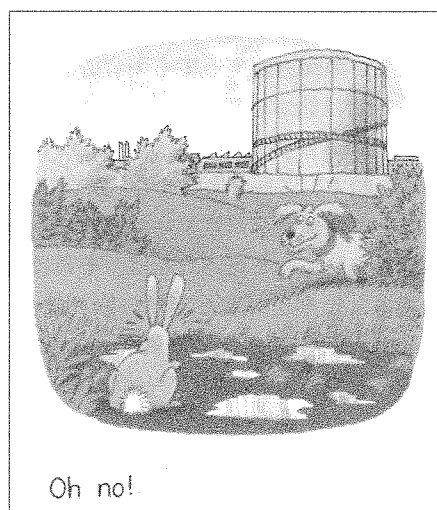


図 7 *Floppy's Bath* 最終ページ

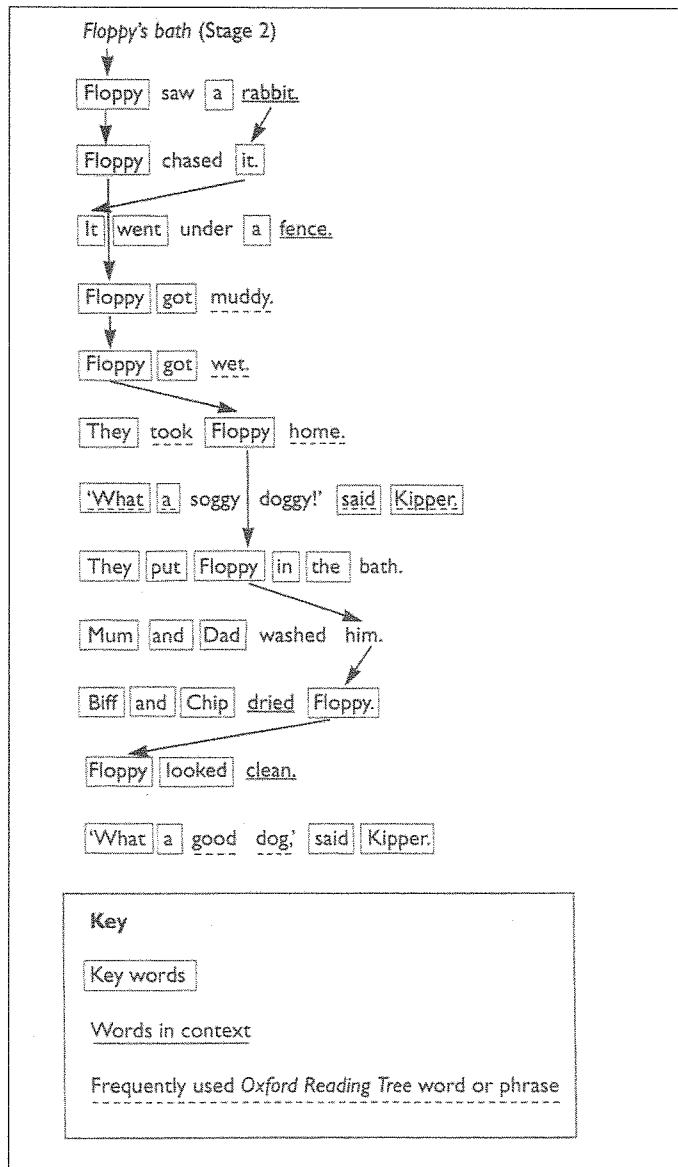


図8 reading schemes の言語構成のダイアグラム

(2) reading schemes の特徴

1) 重要な語彙・文法の反復とコンテキストの力

ダイアグラムからもわかるように、reading schemes は、作想的に key words⁶をテキストに盛り込み何度も反復している。この読者世代の子どもたちが日常生活で頻繁に使う high frequency words も同様にたびたび反復している。

このように反復される語の比率が高いことから、reading schemes では、一話あたりの初出単語の数が少ない。しかも、key words や high frequency words は、読者がシリーズ内の絵本をたくさん読むうちに sight words (単語の長さや形などの視覚情報を手がかりとして識別し意味をとれる単語) として定着する。そこで、読者はこれらの sight words やストーリー全体のコ

ンテキストを手がかりとすることによって、初出単語やなじみの薄い単語の意味を推察 (guessing, predicting) できるようになる。ダイアグラム中の下線で示された 'Words in context' が、そのような方略による理解を前提としている単語である。

換言するならば、reading schemes は、実用性の高いことばを徹底的に反復することによって語彙力を高めておいて、それで補えない初出単語や難しい構文の内容については、物語の力を利用して前後の流れから読者自身に推察させる方略を用いているのである。

2) イラストの力

コンテキスト (物語) の力に加えて、物語の理解にはイラストの力も重要である。reading schemes シリーズの教師用マニュアルには "Early books have two meaning systems; a) text and b) illustration. Children need to be helped to understand both." (Hunt, Page, & Pemberton, 1996, p. 12) という記述があり、加えて、イラストが文字と密接にリンクするよう意図的に描かれていること、すべてのイラストが読者になんらかの情報をもたらすよう意図的に描かれていることを明示的に述べている。

3) 'reading for meaning' の 'top down' 式アプローチ

以上をまとめると、reading schemes には、物語の前後の内容やイラストによって多くのヒントを与え、読者に当該ページの文章や単語の意味を推察させる傾向があることがわかる。

同マニュアルには、その編纂方針として 'reading for meaning' を前提とした 'multi-cue approach' を採用していることが明記されている (pp. 12-34)。言語習得初期段階にある児童に対しては、物語＝コンテキストからヒントを与えたり、物語の場面設定自体を読者自身の身近な日常生活の場面とすることで、わからない単語の意味を推察しやすくしているのである。

物語全体の意味を理解し、これを手がかりとしてセンテンスの意味を推測し、さらにそれを手がかりとしてそのセンテンスに含まれる単語の意味を推測し、最終的には単語の構成要素である文字と音を推測、理解し身につけていく。'guess' や 'predict' を否定せず、むしろ積極的にそれらの力を活用することで、〈meaning → sentences → words → sounds/letters〉というように、全体から細部へと理解を深めていく 'top down' 式のアプローチである (p. 14)。

このようなアプローチが採用された背景には、'learn to read by reading' を基本理念とする Whole Language Instruction⁷ (Goodman, 1982) の考え方がある。子どもはストーリーの 'context' を頼りに全体から細部へと理解を進め、足りないところを「推測」で補いながら自然に読む力を習得するのであるから、リテラシー教育における最良の方法はなによりも読むに値する面白い物語 (初期は絵本) を与えてやることだとするトップダウン式の発想である (Krashen, 2002)。Whole Language Instruction は、イギリスの小学校でリテラシー教育に reading schemes や real books が幅広く使用されてきた今日までの歴史において、大きな影響を及ぼしてきた概念である。

(3) 教材絵本の特徴と real books との近接性をあわせもつ reading schemes

前述の reading schemes の方略を機能させるためには、物語の展開は、読者の想像や予測を逸脱するような意外性のあるものであってはならない。また、明快な筋書きを作り出すためには、漠然とした概念をあらわすことばも好ましくない。イラストも、読者を混乱させるような多義的な解釈が可能な描写を避け、できるだけことばと絵の対応関係が明確なもの、すなわち具象物を

中心に描く。この点では、reading schemes は「教材絵本」としての共通点をもつ ELT 絵本とよく似ている。

しかしながら、reading schemes には、real books との近接性をうかがわせるような、現代絵本に特有な特徴も多くみられる。

その一例が、*Floppy's Bath* の最終場面（前掲の図 7）である。ウサギを追いかけて泥だらけになった犬の Floppy が飼い主一家に風呂に入れてもらいようやく清潔になった一つ前の場面につづき、最終場面では、Floppy が再びウサギと遭遇してしまう場面が描かれている。イラストにはこのドタバタ劇が幕を開けた第一場面とまったく同じ公園の緑地が描かれており、Floppy がウサギと出会うという出来事も同一である。つまり、先の *Winnie Flies Again* の物語が始まりと終わりの文章に同一構文を反復することで物語に結束性をもたせ、物語全体をテキスト化したのと同様のことを、*Floppy's Bath* ではイラストが行っているのである。前者の物語では始まりと終わりで反復される文章の中に時制の変化という差異が編み込まれていたが、後者の *Floppy's Bath* では、よく似たイラストの反復のなかに、天気（始まりの場面では雨降りだが、終わりの場面では雨上がりの明るい空が描かれ、地面には水たまりができています）や Floppy の首に巻かれたリボンの有無（始まりの場面では描かれていないが、風呂場で綺麗に洗ってもらったのちに飼い主が着けてくれたため、終わりの場面では描かれている）、絵の構図（ウサギと Floppy の位置が、始まりの場面と終わりの場面とで逆となっている）などの差異が描かれている。

また、この最終場面の文章は、'Oh no!' の一文のみである。イラストからはこののちにドタバタ劇の第二章が幕開けすることが予見されるが、ことばではそれを説明せず、読者の想像に委ねるオープンエンドのかたちをとっている。このような物語の未決定性や多義性は、現代絵本 (real books) によくみられる特徴である⁸。このように real books が物語の面白さを演出するために使用する手法が、reading schemes にもまみられるのである。

5. まとめ

3 種類の絵本の特徴とそれらの英語教育における活用の有効性について、最後に簡単にまとめる。

real books は、*Winnie Flies Again* において〈no traffic lights〉、〈no traffic jams〉、〈Just the empty sky.〉といった表現例にみられるように、抽象的でイメージ性の高い概念やことばがより多用される傾向があり、また、時間経過と空の混雑を通して「近代化と喪失」のテーマが象徴されたように、物語のメッセージが直接的に言語で説明されることはあまりない。ELT 絵本や reading schemes と比較した場合、イラストと文字とが必ずしも明瞭な対応関係をなしていないため、読者には、ことばやイラストを慎重に受け止め、出来事の因果関係や意味などを「推察」したり「想像」したり、時には自由に「創造」したりしながら「読み解く」力が求められる。そのため、英語教育において教科書として用いた場合には、難易度が比較的高いと考えられる。しかし、その分、物語の解釈が読者にある程度までゆだねられることによる読書の楽しみや自由さがあり、英語の自然な語りと豊かな表現にふれることができるといった利点があると考えられる。

ELT 絵本は、同 *Winnie Flies Again* においてヘリコプターや飛行機といった具象物の名称がイラストに合わせて書き足されていたように、絵とことばとが明確な対応関係をもつ傾向が強く、抽象的なことばや含みをもった表現はあらかじめ排除されている場合が多い。したがって、読者

としては、絵とことばの対応関係を追いかけてながら意味を「確認する」作業に、より多くの力を費やすこととなる。難易度がコントロールされているため、とくに初級の読者にとって読みやすいという利点があるが、物語の語りとしては不適切な現在形が用いられ、物語の流れ上必要性のないことばが教育目的で付加されるなど、物語作品として不自然さを包摂していることも否定できない。

reading schemes には、両者に共通する特徴がみられる。reading schemes は物語のコンテュストやイラストから読者すなわち学習者がヒントを得られるよう配慮された構成となっている。そのため、絵とことばとが密接に対応づけられている点や、抽象性、含みのある表現が予め排除される傾向にある点など、ELT 絵本との共通点が数多く見受けられる。しかしながら、初級レベルであっても物語には過去形を用いる、high frequency words などを多用して母語話者が日常的に使用するフレーズをふんだんに登場させるなどの点では ELT 絵本よりも real books に近く、reading schemes のことばは母語話者にとって、より自然なものであるといえる。換言すれば、reading schemes とは、子どもたちにとって、もっとも身近で実用的なことばを徹底的な反復によって身につけることを意図して構造化された「教科書」でありながら、同時に real books との近接性も備え、物語として楽しめるしかけが施された絵本である。このような reading schemes は、英語教育においても有効に機能する可能性が高く、その活用法をさらに模索する価値は十分にあると考える。

註

- 1 「絵本」は英語では一般に、picture books, picture story books などの語で総称される。図 1 で real books と表示したものも本来ならばこれらの総称で呼ぶべきものだが、本論では、分析対象とした 3 種類の絵本を区別するため、便宜的にあえて real books と呼んでいる。'real books' とは、もともとは 1980 年代からイギリスの教育界で用いられるようになった用語である。識字や発音教育のために編纂された reading schemes よりも、子どもたちの想像力に訴える芸術的な絵本 (picture books) のほうが子どもたちの「読み」(reading) の教育に役立つとする学者・研究者らが、reading schemes と区別して従来の絵本を real books と称して、その優位性を主張したことに由来する (ワトソン・スタイルズ, 2002, p. 98; BBC News, 2002)。「ELT 絵本」は固有名詞として一般化されたことばではなく、本稿において筆者がその内実をとって便宜的につけた名前である。
- 2 「典型的な《詩的機能》とは、《逸脱》および《反復》あるいは《並行法》といった手法で創意工夫を凝らし、文学以外の言語を《背景》にして、意識的にまた創造的に言語と意味を《前景化》し、《異化》することである。ヤコブソンにとって、反復の型は、すべての言語とはいわないまでも、世界の多くの言語において、音韻、統語、語彙、意味のすべてのレベルで、詩の言語のもっとも重要な特徴となっている」(ウェイルズ, 2000, p. 363)。このように、詩的機能とはことばを作品として構造化するテキスト化の過程において強く働く機能である。
- 3 結束 (性) (cohesion) とはハリデイ (M. A. K. Halliday) らの文法分析、テキスト言語学においてとくに重要視される概念で、代名詞・冠詞・副詞などの相互指示機能や語彙的関連などによって保持される (田中, 1988)。ウェイルズ (2000, pp. 72-73) によれば結束は、文をより大きな単位 (段落、章、など) に連結する、つまり「つなげる」手段 (文法的、語彙的、意味論的) である。結束上のつながり (cohesive ties) には明示的なもの (反復や同一指示) と暗示的なもの (省略) がある。脚韻、連構成、頭韻なども、詩における音韻論的結束である。したがって、結束性は詩的機能を構成する概念でもある。
- 4 魔女の Winnie the Witch とその愛猫の Wilbur を主人公とする絵本シリーズの一冊。原作は英語で書かれ、イギリスの児童文学賞を受賞したほか、各国語に翻訳され 20 カ国以上の国々で読まれている。「赤ずきんちゃん」や「ヘンゼルとグレーテル」など、昔話や民話をさまざまな形態 (real books,

reading schemes, ELT 絵本)としてそれぞれ別の作家・イラストレーターが描いたものは世間に数多く存在するが、本稿でとりあげた *Winnie Flies Again* のように、同一の作家・イラストレーターが real books として描いた現代絵本が、言語の書き換えを経て ELT 絵本となるケースは非常にまれである。本稿では、言語面により強く焦点をあてて real books のことばと絵本教材のことばを比較するため、この作品を分析対象として用いた。

- 5 「絵本」は picture book と二語で記述されるのがふつうだが、著者の Maria Nikolajeva や Carole Scott ら、一部の絵本論研究者は、絵とことばの両者が分かちがたく結びついている絵本の特性に鑑み 'picture books' や 'books with pictures' と区別するため、あえて 'picturebooks' と一語で記述する (Nikolajeva & Scott, 2006; Lewis, 2001)。
- 6 この reading schemes (*The Oxford Reading Tree* シリーズ)における key words とは、当該の物語を読み解くために有効と思われる単語であることと、同シリーズの当該レベルの物語全般 (各レベルに数十話ずつの物語が存在する)を通して頻繁に使用されている単語であることを基準に同シリーズ内で定められている単語のことをさす。これらの key words は同じレベルの物語を何冊も読むと相当な頻度で目にするようになるため、読者はやがてその単語の形を視覚的にとらえ意味内容と結びつけることができるようになることとされる。たとえ正確に綴りがわからなくても、フォニックスのルールに従って発音することができなくても、単語の長さ・形の視覚情報から認識、理解できることばを sight words という。sight words をできるかぎり多く身につけ sight vocabulary を充実させることはリテラシーの初学者である児童にとって非常に重要とされている (Hunt, Page, & Pemberton, 1996, pp. 30-34)。
- 7 1980 年代以降、英米豪などの国々においてリテラシー教育のあり方をめぐる論争、'Reading Wars' が巻き起こった。その際、子どもたちは「読むことによって読むことを学ぶ (learn to read by reading)」のだからなによりも面白い本を与えることが重要であると主張したのが Whole Language Instruction 派である。ここでは、物語のコンテキストやイラストからヒントを得て全体の意味を「推測 (guessing)」しながら読むことがよしとされ、物語全体の理解がやがて細部 (センテンス、単語)の意味の理解にもつながり、また、物語をたくさん読むことによって難しい単語の読み方も経験的に習得できるとされる。これに対して、Phonics Instruction 派の考え方では、まず最初に発音と綴りのルール (sound-spelling correspondences) を教えることが重要であり、絵本などを読むことは、そのための訓練として役立つ場合のみ有効であるとされる (Goodman, 1982; Krashen, 2002)。
- 8 ワトソン・スタイルズ (2002) によれば、読者の解釈に多くをゆだねる「未完結性」や「テーマ自体にどちらにもとれるあいまいさ (両義性) がある」こと、「未決定性」、「多義性」などが現代絵本・ポストモダン絵本の特徴とされている (pp. 9-12)。

参考文献

- BBC News. (2002, January 19). Real books beat reading schemes. Retrieved October 10, 2008, from <http://news.bbc.co.uk/1/hi/education/1769080.stm>
- Goodman, K. S., Goodman, Y. M., & Hood, W. J. (Eds.). (1989). *The whole language evaluation book*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- ハリデイ, M. A. K.・ハサン, R. (1997). 『テキストはどのように構成されるか』(安藤貞雄・永田龍男・高口圭転・多田保・中川憲・訳) ひつじ書房. [原著: Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman].
- Hunt, R. [Illustration by Brychta, A.] (1986). *Oxford reading tree (Stage 2, More stories A) Floppy's bath*. Oxford: Oxford University Press.
- Hunt, R., Page, T., & Pemberton, S. (1996). *Oxford reading tree, Teacher's guide 1: Stages 1-3*. Oxford: Oxford University Press.
- Jakobson, R. (1987[1958, 1960]). Linguistics and poetics. In *Language in literature* (pp. 62-94). Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社.
- Krashen, S. (2002). Defending whole language: The limits of phonics instruction and the efficacy of whole language instruction. *Reading Improvement*, 39, 32-37.

- Lewis, D. (2001). *Reading contemporary picturebooks: Picturing text*. London and New York: Routledge Falmer.
- 松本猛 (1982). 『絵本論：新しい芸術表現の可能性を求めて』岩崎書店.
- Nikolajeva, M., & Scott, C. (2006). *How picturebooks work*. New York: Routledge.
- Paul, K., & Thomas, V. (1999). *Winnie flies again*. Oxford: Oxford University Press.
- Paul, K., Harper, K., & Thomas, V. (2001). *Winnie flies again: Edition for learners of English*. Oxford: Oxford University Press.
- 内田麟太郎 (2006). 『絵本があってよかったな』架空社.
- ワトソン, V.・スタイルズ, M. (編) (2002). 『子どもはどのように絵本を読むのか』(谷本誠剛・監訳). 柏書房. [原著: Watson, V., & Styles, M. (1996). *Talking pictures*. London: Hodder & Arnold H&S].